

OOO

PAPER

WORKS AND JOURNALS



Architecture and Design

What’s OOO

A group that creates culture through architecture. When designing, we will propose a straightforward idea suitable for the occasion by observing various environments and cultures surrounding the project in a cross-cutting manner and tracing back to the essential proposition.

We consider that the resulting cultural space will be unconsciously comfortable and universally beautiful. We strive to understand traditional culture, cultivate the modern culture that is there now, and creat future culture.

OOO とは

建築を通して文化をつくる事を目的として設計活動を行うグループです。設計を行うにあたり、プロジェクトを取り巻く様々な環境や文化を横断的に観察し、本質的な命題まで遡る事で、その場に相応しい素直なアイデアをご提案します。そうしてできあがる文化をまとった

空間は、無意識的に心地よく、普遍的に美しいものになると考えています。 培われてきた伝統文化を理解し、今そこにある現代の文化を耕し、これから先の文化を創出します。

etoe

location : Shinjuku-ku, Tokyo, Japan
completion : 2025
function : Sauna hotel
design : interior, sign, branding
size : 397.98 m²
architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada,
Ryo Tsukahara, Fumiya Ishii

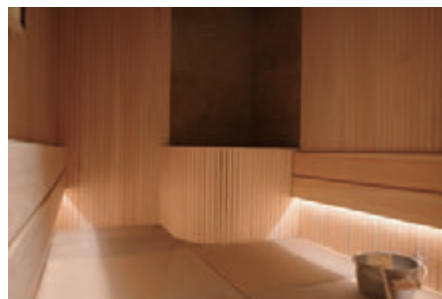
produce : Junko Genma
construction : AREACRAFTJAPAN Co.Ltd
brand direction / copy writing : Ayane Arita
logo design: HA
web design : Yuji Ishibashi
photo : RiLi



eye to eye

ラブホテルは変革期にある。ジリ貧傾向のある従来型のラブホテルの枠組みを壊し、人と人との関係性を醸成する場としてホテルを再解釈することで、新しいカルチャーの震源地をつくるプロジェクト。築7年客室数18室3階建ての既存ホテルの1階をプライベートサウナフロアとし、2、3階のホテル客室はデイライトが気持ちの良い健康的な客室に内装や家具をアップデートした。ここ百人町は江戸時代に他所から来た武士の住まいとして定着したことを起源に、今では外国人を受け入れるミックスシティである。多種多様な文化を受け入れるこの街では自分が自分らしくいられる空間であることが重要であった。

ここでの「自分」のペルソナ像は仕事面でのキャリアを積み、忙しい日々を過ごしながらも、精神 / 身体的自己ケアに興味が出てきたヘルシーな女性であり、そんな彼女が訪れたくなる空間づくりを目指した。建築は論理の積み上げによって成り立つものであるが、内装選定の基準は、最終的には感性の領域になる。選定プロセスでは、膨大なマテリアルの中から、ファンデーションをまとったようにやわらかくエレガントかつ、どこか刺激的なマテリアルが洗い出された。結果的にはこのホテルのプロジェクトに並々ならぬ思いをもつ女性プロデューサーである弦間氏のキャラクターそのものが現れる空間になった。



column

りんごと茶碗と日本橋

スーパーマーケットで山積みになされたりんごからひとつ手に取るとき、無意識的に選んでいるのは均等に膨らみ、満遍なく赤く色づいた個体であると思う。生命体として完全に近いものが美味しそうに見えるのは、その方が種の保存において優位であることに起因するためだろう。一方骨董市で茶碗を選ぶとき、工場生産で作られた隙のないパーフェクトな形状のものには感情を揺さぶられず、作家の手仕事による歪みやズレが私の感性とマッチしたものと出会うことができる、それを連れて帰る。これは不安定な形状であっても無機物として原子が安定した状態を長時間維持されてきた（これからもあるだろう）事実への安心感が念頭にあるからなのではないかと思う。

学生時代、大野秀敏氏の講演会で「父の仕事は否定されるが、祖父の仕事は賞賛される」とい

う話を聞いた。たしか三越前の日本橋は建設当初大バッシングを受けていたが、やがて保存運動まで起こるほどに時代の移ろいとともに入々の評価が変化したこと触れてのことだったと記憶している。

建築はりんごのような生物的なサイクルで定着するものではないため、茶碗や日本橋に近い。長く存続すればするほど素晴らしい。建築が1000年存続するには人々に愛される必要がある。愛される建築は環境条件から生まれたオリジナルで自由な形状で、自然の摂理に順応し、背景の文化と連続する、耐久性のある建築だと思ふ。

OOO 馬場亮平

たぶん、世界には、
言葉にしなきゃ伝わらないことと同じくらい
言葉では伝わらないことがある。

ひらこう。こころを、からだを。
この場所で、見つめあって、話して、ふれあって、
目には見えないなにかが、ふたりをめぐる。
お互いの境界はあいまいになってゆく。
eye to eye.

目の奥をのぞけば、
こころのやわらかいところにまで
ふれられたような、そんなうれしさ。

eto e
sauna & body communication

東京都新宿区百人町 2-20-24
JR「新大久保駅」から徒歩 3 分
JR「大久保駅」から徒歩 3 分

東京都新宿区百人町 2-20-24
<https://etoehotel.com>



TAKAOKA

location : Chiba, Japan
completion : 2025
function : restaurant
size : 50 m²
architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada

design : interior
construction : niceon Co., Ltd.
(Ryota Tsurumi, Moe Ichihara)
plastering : Tatsuya Tokura
photo : Shota Hiyoishi



column

知覚をひろげて

「関係のレッスン」という展示を見に行った。作者は森で拾った枝を 3D スキャナーでデジタル化し、じっくり観察した。「異なる枝に同じ曲率を見つける」といった、補助線を引くような行為で枝どうしの関係性をすくい取った。そのデータを数万円の 3D プリンターで出力する。驚くほどシンプルで、驚くほど手の届くプロセスだ。作品を前にした私は、「ただの枝」と自分とのあいだの世界がふっと広がるのを感じた。その時、デジファブは私にとって感覚器官のような存在となり、新しい知覚と世界を気づかせてくれた。その技術が決して特別な装置ではなく、数万円の機材で自分の生活にも取り込めるほど身近なものであるからこそ、その知覚の変化は現実味を帯び、より強く自分の中に響いたのだと思う。知覚の数だけ世界が存在する—知覚の数だけ世界が存在した。人は年齢を重ねるほど、知覚を拡張するよりも、すでに持っている知覚を他者と共有するほうへ傾くという。しかし、本当は新しい世界はいつも手の届くところにあり、知覚によって開かれていく。そう思うと、目の前に広がる世界を見逃すのは、なんとも勿体ない。知覚を拡張する行為は、大げさな挑戦ではなく、日々の生活の隙間に滑り込みながら、静かに起きているのかもしれない。

OOO 俵颯太



みたびたかおか

鮎屋「たかおか」の三度目の設計プロジェクト。2015 年に千葉店を、その後、東京店を設計した。そして今回、ふたたび千葉の店舗へと凱旋することになった。大将は千葉店の内装に強い愛着を持ってくださっており、東京への移転中も千葉店のテナントを借り続け、大切に保存していたださっていた。そして、今回の再移転を機に、その千葉店をリニューアルすることとなった。プラン自体はシンプルで骨格の強いものであったため、構成はそのままに、経年劣化した素材を中心に全面的な更新を行っている。壁面は東京店から引き続き左官都倉の都倉達弥氏による土壁掻き落としで設え、客席の天井をヒノキの網代天井に

更新した。店の象徴である輪島塗の大壁も、今回で三度目の引越しを終えた。みたび、たかおか。スクラップアンドビルドが当たり前の内装設計において、とても幸せな巡りあわせを持ったプロジェクトである。



BRINGUP CHIBA

Child Development Support Center Gallery

location : Chiba, Japan
completion : 2025
function : Gallery
size : 26 m²
design : interior

architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada,
Megumi Watanabe
construction : Fujiken
photo : Ryohei Baba

column

淡い期待

ここ数年、よく親知らずを抜いたと同世代の話を聞くようになり、自分もそろそろかと思っていた。ついに歯医者から親知らずを抜くことを勧められて、事前に色々調べていたら親知らずが人によってかなり形が違うことに衝撃を受けた。歯医者に褒められたほど可愛いオバケの形のようなもの。細長いものや、四つ足や三つ足など足が生えてるものまで様々なものがある。まるで貝殻が真珠を育てている気分だった。真珠のように綺麗ではないけれど、抜くまで自分では直接見ることが出来ないが、確かに存在しているものという事実にもロマンを感じた。期待を胸に歯医者に向かい、実際に抜歯をしてもらうと、そんなに珍しくもない三つ足の親知らずで、正直がっかりした。だけど、私にはまだ 3 本残っている。いつか可愛い親知らずに出会えるのではないと淡い期待を持ちつつ、虫歯にならないように日々の歯磨きを大切にしている。

OOO 渡邊 愛

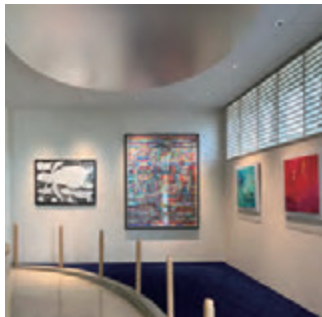


ひずみを反転させること

千葉県千葉市美浜区のちば子ども発達センターのエントランス廻りの改修計画。センターでは、様々な個性を持つ子どもたち、そしてその親御さんがエントランスを出入りしている。そのデッドスペースにアールブリュット「生の芸術」を作品展示することで子どもたちとその家族に彼らの「個性」を肯定するきっかけを感覚的に生むことを目的とする。小学校から福祉施設への転用により無造作にスロープが置かれたことで、何にも利用することができない空間的ひずみが生じた。そのひずみを反転させる操作をすることで、作品展示するための専用かつ特別な空間とし、より作品を純粋に感じられる環境をデザインする。展示作品は HERALBONY の絵画とし、センターを利用する子どもたちの作品が等価に展示される。スロープの奥のデッドスペースにカーペットを敷き、靴を脱ぐという行為が促されることで、空間が切り替わる。既存手摺支柱にペーパーコードを巻くことで緩やかな境界に転じた。それらの頭上にある下がり天井はエリア一体を覆う大きさのアルミ複合板であり、一見バラバラなエレメントにギャラリーとしての統一感を持たせる。ギャラリーに足を踏み入れると、天井が鈍く反射し鑑賞する人を迎え入れる仕掛けとなっている。このギャラリーを通して



多様な世界へ触れ、自分の作品が飾られることで、表現することの楽しさに気づき、新たな自分を出会う場となる。センターに通う親子の未来の可能性を広げることが出来ればと願う。



SUSHI-ARATA

location : Chiba, Japan
completion : 2025
function : restaurant
size : 54 m²
design : interior
architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada,
Kayo Sato

lighting design : GLA (Katsumasa Asada)
construction : hatsushiba
furniture making : mute furniture(nobuhiko hidaka),
niceon(Ryota Tsurumi) , yaekenchiku(shuji nakamura)
lumber supplier : marushi mokuzaï
plastering : Tatsuya Tokura
photo : Shota Hiyoshi

古代に数寄屋があったなら というファンタジー

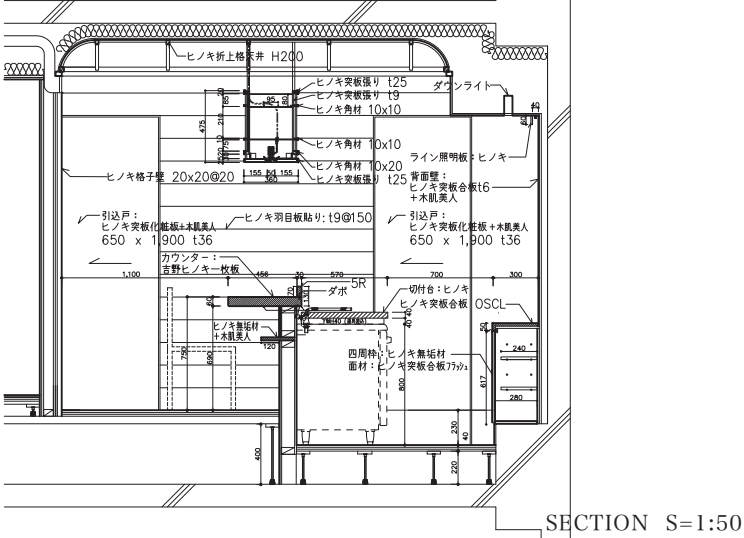
伊勢神宮の建築は森に静かに佇み、自然と人の営みから成る調和の極致を示している。深い緑の樹林に包まれ、檜の建物は光を受けて輝き、木肌の細やかな質感が美しさを放つ。装飾は控えめながらも神々しい存在感を宿し、訪れる者の心を清める。こうした森の静けさや神宮建築の清らかさは、鮎屋の空間にも通じる美意識として現れる。鮎屋のカウンターは木の温かみを備えつつ、職人の手仕事の緊張感や丁寧さを際立たせる絶妙な距離感を保つ。客は単に食事をするのではなく、職人の所作や素材の変化を五感で受け止める。香りや手触り、壁や天井の質感、柔らかな照明の配分、それらすべてが重なり合って空間に呼吸を生み、客は鮎の味を楽しむことができるのである。

鮎新では、「深い闇の奥にある、檜の清らかな空間」を目指した。檜の一枚板カウンターをはじめ、客室とつけ場はすべて檜素材で統一し、繊細なディテールを施すことで各部位に固有の存在感を与えている。

一方、都倉左官による黒大津壁は、黒の漆喰を塗り込み、鍔で何度も押さえ磨き上げることで仕上げられる、日本の伝統的な左官技法の中でも最上級かつ極めて貴重なものである。磨きによって生まれる奥ゆかしい光沢は、空間にしっとりとした闇の深みを与え、光と影の微細な揺らぎを生み出す。檜の温もりや香りとともに、黒大津壁は森の奥行きを思わせる静かな緊張感を鮎屋の内部に再現している。それは職人の所作と相まって、空間に静謐と幸福感をもたらす。もしも古代に数寄屋があったなら。



そんな想像を手がかりに、オーセンティックでありながら幻想的なニュアンスをまとった空間を目指した。自然素材と人の営みの微妙なバランス、空間の呼吸、丁寧な所作、そのすべてが清らかさを生み出す。目に見える美しさだけでなく、素材や空間への敬意、訪れる者の感覚への配慮を通して、呼吸や光、香り、温度といった微細な要素までも包み込む、豊かな体験が提供されるのである。



鮎新

豊洲から仕入れる全国各地の厳選した魚介と千葉の漁港から仕入れる地の食材で旬の食材に秘められた本来の旨味を引き出す。

千葉県千葉市中央区新町 15-5 6F
043-306-4558

<https://sushiarata.owst.jp>

column

同時に在るということ

はじめて会う人と散歩をした。

どんなテンポが心地よいのか、会話の行き先を探りながら、この瞬間より少しでもいい場所を目指して、ぶらぶら歩く。午後いっぱい歩き、話も尽きた頃、不意に松竹映画のラストシーンのような壮大な夕暮れが広がった。

誰かといると、空気に微かな動きが生まれる。それは映画や本にはない、生きている瞬間だ。その空気感が次のシーンを作り出す。

——ゴダールには、シナリオを持たず即興で撮影された映画作品がある。物語の筋は粗いが、そこにはストーリーでは説明できない魅力が映し出されている。

コロナ以降、世界をモニタ越しに眺めているような感覚が続いていた。

しかし、あの日の夕焼けのシーンは、同じ瞬間に誰かと存在している事、その同時性が未知のシーンを生む事を暗示していた。

松竹映画のような円満なラストシーンに憧れながらも、ゴダール映画のヒロインを演じるジャン＝ポール・ベルモンドやアンナ・カリーナのように、偶然性に身を委ねる軽やかさを自分の中に携え、思考する。

そんな風に、誰かの憧れと、その先にあるシーンを静かに線で紡ぎ続けられたら、それは幸福かもしれない。

OOO 佐藤佳代



CEMETERY YARD



episode - よい街とよい墓地

ヨーロッパにいたころ、初めての街で安心感を与えてくれたのは、教会と公園であった。異なる言語や文化を受け入れ、ひとりであることを許容する空間が、その街の豊かさを物語っていた。天気の良い日はサン

ドイッチとコーヒーを買い、公園で食事をする。友人と話をしたり、ギターをぼろぼろと弾いたり、自分の時間、空間をつくる人の姿をたくさん見た。数日たって、そこが墓地であることを知った。彼らにとってのその場所は、墓地であることが生む緩やかな規範のなかで見つけたひとりだけの場

所であるように感じた。墓地や祈りの形式が変化する今、普段の生活と墓地との距離は、もう少し近くてもよいのかもしれない。都市の近くに、現代の喧噪を離れ、ひとりになれる場所、故人を思う場所、さまざまな時間が交差するあわいをつくることができないか考えた。

column

形容されない空間

誰もが容易に情報を得ることができる今、住まいの理想像は次々に更新される。便利さや一時的な最適解が共有されることで、生活は細かく分解され、断片化していく。その断片をこぼさないよう掬い上げ、空間を組み立てる姿勢は、設計者の経験と日々の反復的な実践に基づく、出来事への名付けの行為とも言える。その名づけは、空間の従属関係から解放し、その場所を構成する等価であるもののひとつとして扱われ

る。それを形容されない空間と呼んでみたい。形容されない空間は、ひとつの住まいという物語の上に配置される。それは決して住まいの主題として浮かび上がることはないが、その場での正しさを纏い、そこから剥がされると意味を失う治具のように、緻密で複雑に設計されている。世の中に流通する正しさとはまた別に、日常の小さなドラマが逆行的に発見される余白が意図されている。その一方で、僕が抱える小さな違和感は、形容されない空間は、この住まいで起こるドラマを

ある方向へ収束させてしまうのではないかという点にある。正しさやドラマの発生を担保するためではなく、むしろその断片を正しさ以外の土俵に引き込むことのできる関係を形式として仮構してみる。要望も構造も文脈も積み重ねてきた設計者の決定も自律する形式あるいは構造の中に一緒にたに入れてみることでそれらの意味は再定義されていく。止まることのない断片化を受け容れ、新たな文脈に位置づけ直すことのできる形式とは何かを考え続けてみたい。ある正しさに則った健やか

霊園計画を通しての思索

都市部から車で約 15 分、鬱蒼とした森林のアプローチを抜けた先、視界は突然開かれる。周囲を急峻な山々に囲まれたこの敷地は、採石という産業行為によって地形がリセットされたタブラ・ラサである。不自然なほどに平滑にされた地盤と鋭利な縁は、日常のスケール感を容易く喪失させる。ここに至るまでに辿ってきた斜面を登る感覚、生い茂る木々、それらの自身と世界を繋ぐ感覚は突然、身体から引き剥がされる。

この俗世と離れた宙づりの大地に墓地の計画を行う機会を得た私たちは、生と死に始まり、祈るという行為、大地に建築が建つということ、そして現代の都市空間に至るまで思索することとなった。

祈りの空間とその変化

お彼岸やお盆に一族が墓前に集い、先祖代々の墓石に手を合わせる光景は大きく変わり始めている。長く日本の弔いを支えてきた「家墓」は、核家族化や未婚化・少子化・長寿化のなかで、多くの世帯にとって精神的・経済的な重荷となりつつある。その変化に呼応するように、樹木葬や散骨など、石塔に固執しないスタイルが台頭してきた。人々は形式的な「家」の継承よりも、自らの価値観や美意識、死生観に沿うかたちで、自然に還ることや愛した風景に眠ることを選び取り始めている。いま求められているのは、「家」や「血縁」の枠組みにとらわれない、開かれた追悼の空間である。それは、見知らぬ他者と静かに隣り合い、互いの記憶が響きあう場として、生者が心を鎮め自分と向き合うための場所へと再定義されつつある。

その場で起こる人の行為が変われば、空間も変化していく。墓地という空間は、新たな時代の祈りと追悼を受けとめるとともに、より開かれた現代のサンクチュアリとして私たちの生活に寄り添う可能性を孕んでいる。



な日常が無批判に賛美される今だからこそ形式やフォルムがつくりだす空間を信じてみたいと思う。

OOO 林翔太郎

function : cemetery
architecture : 700 m²
area : 19,000 m²
design: architecture,landscape
construction : RC
architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada,
Shotaro Hayashi, Sota Tawara , Kayo Sato



空気に消失点をつくること

無限にも感じられる大地にひとつの完全な円環と墓域を繋ぐ緩やかな道を通した。幅が伸縮する道によって緩やかに墓域を分節しながら、ただ漠然とした自然に対してではなく、祈りに補助線を与えるような場を設えた。行き場を失い拡散していたこの場所の空気に緩やかな秩序をもたらす。

都市部へと開かれた眺望を得ることのできる敷地先端に、円環の建物を据えた。この建物は、大地からわずかにむくりを持たせた円形の屋根を持つ。折紙の構造原理に基づき、紙が折り目によって強度を得るように、重力に抗う軽やかさと力強さを獲得している。中心と周縁といった対立する関係性をやわらかく包摂し、この霊園全体の調和を象徴するシンボルとして静かに佇む。四方からアプローチするすべての動線を等価に受け入れる3本の大きな柱を起点として切り取られる風景と、刻々と変化する光、そして人々の流れに呼応するように、空間の質は緩やかに移ろう。

墓地を計画することは、死者のための施設をつくることではなく、生きている私たちが、死とどう向き合うかを問い直す行為である。かつてのように死を家や宗派の内側に閉じ込めるのではなく、個々の生のあり方と結びついた祈りの場として、死をふたたび日常へと引き戻そうとしている。祈りが穏やかな規範として空間をかたちづくり、そこに集う人々の

ふるまいを整えていく。この計画も都市の喧噪から半歩退きつつも完全には切り離されない場所に、生と死、日常と祈り、個と共が重なる場をつくろうとする試みである。墓地を終着点としてではなく、生者と死者の時間が折り重なる風景として構想するとき、現代における墓地の新たな意味が立ち現れると考える。



column

日常採集

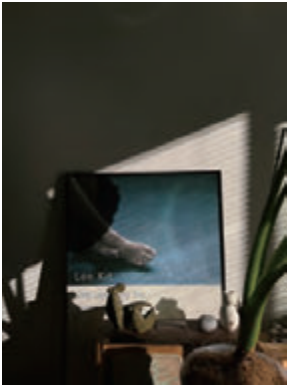
品川の住宅地の一角に、立派な門構えをもつ一軒の邸宅があった。その邸宅は美術館として利用されており、複数の展示室（部屋）が廊下を介して連なっていた。展示される作品は写真や映像、立体物、インスタレーションなど表現方法は様々。どの作品も共通して感じられたのは、邸宅として計画された建物であるがゆえに、展示するアーティストにオブセッションを抱えさせ、自然とサイト・

スペシフィックな作品が生まれてくること。ある上海のアーティストは、プラボックス越しにプロジェクターで映像を投影していた。プラボックスを介して映し出された映像は、意図的に映像加工されたものとは違い、日用品がもたらす“日常のフィルター”がかかった、ささやかな歪みと静けさを帯びていた。その体験は、ずる休みをした日に、週末とは違う平日の静かな窓辺を、横になったままぼんやり眺めているようだった。日常から遠く離れたところで日常を拾う、この体験がどこか安心することに気づ

いた。以降この邸宅でどんな日常を採集できるか、楽しみだった。

この展覧会から三年後、邸宅は老朽化のため閉館し、ほどなくして解体されマンションが建設された。

OOO 塚原諒



sense of architecture

Tim Gordon / photographer



Mykonos, Greece



Paseo Dalt Mirada, Mallorca, Spain

幾何学は誇張された時に象徴性を帯びる。でも、そんな「遊び」は空を飛ぶ鳥たちにしか見えない。地上に立つとその構図は姿を消す。気づかぬ間に、それは良くも悪くも僕たちを導いている。

column

木材コンサルスイマー

鹿児島で生まれ育ち、その後は山口、島根、インドネシアと住まいを移し、東京で働き始めてから気づけば5年。いまは妻と子どもと穏やかな日々を送っています。

よく「どうしてインドネシアにいたんですか？」と聞かれます。きっかけは 30 歳のとき、JICA 青年海外協力隊としてジャカルタ代表の水泳チームのコーチに採用されたことでした。現地で唯一の日本人コーチとして、毎朝 4 時から選手たち

と泳ぎ、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教など多様な宗教や文化に揉まれ、喜怒哀楽の幅が大きい日々を過ごしました。そんな激動の毎日の中でも、ナシゴレンやミーゴレンのような親しみやすい食べ物、そしてインドネシアの人々のやさしさに、何度も救われたことを覚えています。

いまの職場である東京工営では、「自称・木材コンサルタント」として、建築家や工務店の皆さんから寄せられるさまざまな質疑や課題に向き合っています。材料はモノづくりの基礎であり、同じ木材でもアイデアひとつでその表情も役割も大き

く変わります。その材料を選び、調達し、現場へとつないでいくこの仕事は、地味に見えるかもしれませんが、建築が立ち上がっていくのを肌で感じることができます。

鹿児島からインドネシア、そして東京へ。振り返ると、場所は変わっても、いつも「人」との関わりに支えられながら生きてきたように思います。これからも材料を通して、そんな関わりを少しずつ豊かにしていきたいと思っています。

(株)東京工営 松井裕之



Wat Pho, Thailand, Bangkok

巨大な仏像の前で、信仰の有無は重要ではなくなる。空間の余白に差し迫るそのスケールと色濃く沈みのある艶をまとった金色の表層。その双方により、内部に漂う空気は張り詰めていた。意味よりも先に、圧倒されるという感覚だけが立ち上がる。

時間、人、空間、物質。それらが重なり合うところから、建築的な感覚はにじみ出てくる。そんな瞬間や現象を sense of architecture と呼んでみた。これまでに書き留めてきたまばらな紀行を手がかりに、その曖昧なコトに輪郭を与えてみたい。

訳：石井文哉



とある裏通りに、ウイステリアが覆いかぶさるように架かったパーゴラがあり、その下のベンチには、老人が腰を下ろしていた。奥には緑のドアの小屋が見える。パーゴラと小屋のあいだに差し込む光は、自分の立つ場所からドアへと静かな奥行きを与えていた。なんでもない場所がふと特別なものを感じられた。ある場所がただ存在しているだけで、ひとつの出来事になる瞬間がある。



Duomo, Milan, Italy

観光客や地元民で喧噪と賑わう広場の奥に、荘厳に佇む教会。人の流れとは対照的に、その姿には歴史の重みを感じられる。街の中で重要な場所であり続け、時間の積層として、建築そのものに刻み込まれている。

column

無鄰菴

自然に見えるように作られた庭は自然なのだろうか。それとも造形なのだろうか。夏に訪れた無鄰菴を思い出して、ふとそんなことを思った。自然にある田園風景を、縁側から眺められるように——そう考えられてつくられた庭だという。けれど、堀に囲われ、静かにぼつんと佇むその景色は、見方によっては小さなテーマパークのようにも映る。この庭の木々や花々は、ある特定の風景を再現

するためだけに“生かされている”のだろうか。美しく剪定された和の庭に、どこか人間の支配を肯定する西洋的な思想を感じてしまう瞬間もあった。それでも、僕はこの庭が好きだ。ここには、自然と代々の庭師との語らいのようなものが流れている。自然は生きたいように生き、その癖や流れを踏まえて庭師がそっと形を整える。そういう関係が積み重なっているからか、この庭の変化は人間の造形よりも、自然発生的な力の方が勝っているように感じる。

Kew Gardens, London, England

茎の一点から葉が放射状に伸びている。枝分かれではなく、同じ方向性を保った反復。葉の縁にある鋭さは、触れる前から距離をつくらせる。成長の結果であるはずの形が、偶然というよりも、あらかじめ定められていた配置のように見えてくる。生き物であることと、構造を持つことが、ここでは矛盾なく共存している。



僕は、こういうプロセスで出来てくるものを作りたい。自然と人が対話しながら、少しずつ形を育てていくようなものを。

OOO 石井文哉

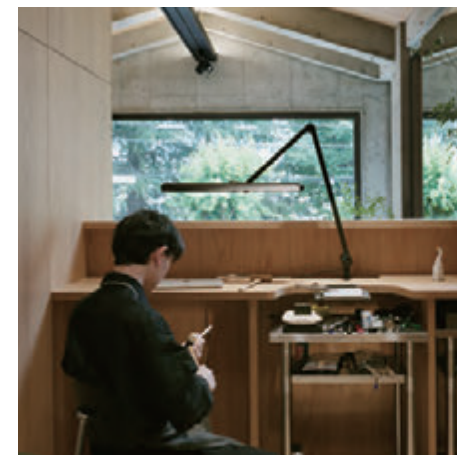
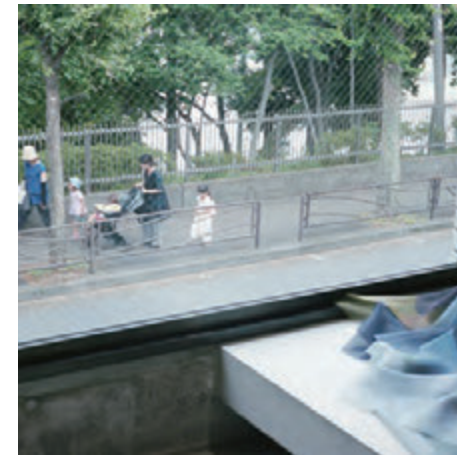


d z d z

atelier store

location : Kanagawa, Japan
completion : 2025
function : shop and atelier
size : 54 m²
design : interior
architect : Yo Sato, Ryohei Baba, Hikomaru Wada,
Takumi Mito

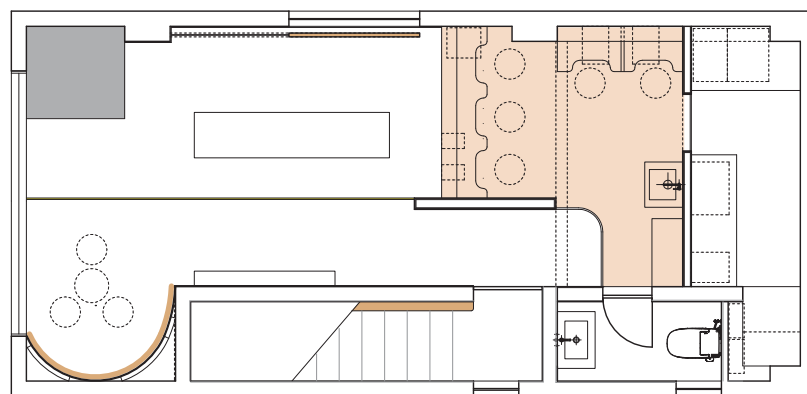
lighting design : GLA (Katsumasa Asada)
construction : TOKYO KENCHIKU PLUS „Ltd
(Satoshi Nakazato,Miwa Hayashi,Hana Yahagi)
furniture : mute furniture„Ltd
photo : Yurika Kono



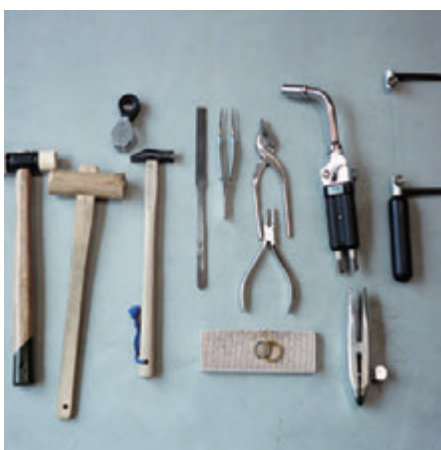
ブルータルで、 なめらかでつややかな空間

ジュエリーブランド「dzdz」のショップ兼アトリエの設計プロジェクト。ころんとした愛らしい既存躯体の中に、行為や居場所が点々と立ち上がるように、建築エレメントを配置した。ブルータルな RC 打放しの空間の中で、きらめくリングたちを思い思いに発見する広場のようなイメージだ。アトリエも木の小部屋のように RC 躯体に挿入し、クラフトのヒューマンタッチとモードなエッジが共存するニュアンスの空間となっている。

手すりやアール壁などのディテールは、触れたときのなめらかな心地よさとわずかな色気が立ち上がるような手つきを意識し、建築とジュエリーのセンスがつつややかに連続するデザインを目指した。



PLAN S=1:100



column

暮らしが大事

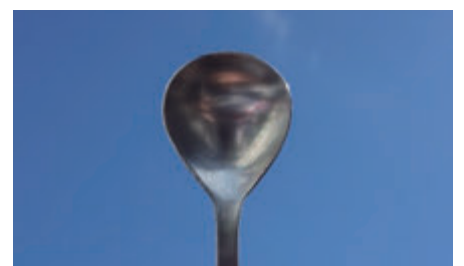
柳宗理のスプースプーンが使いづらい。幅が広くどう口を回しても口の穴にしっかりこない。

ある俳優が、こう言っているのを耳にした。「生活が何より大事だなんて思います。人生をかけて仕事をするのではなく、私は人生をかけて生活をして、それを仕事に落とし込みたい。」

民藝礼賛、暮らしが大事。それは生活のためという機能性や、（ささやかで尊い）暮らしに対する目線へのコンプライアンスを盾にかたちを倫理に従属させてしまっていないか。また、「私」を安易に正当化するための拠り所になってしまっていないか。

使いづらくても柳宗理のスプーンをカトラリーケースから選び使い続けている。そして、今でもこんもりかわいいかたちのこのスプーン使うジョイは薄れていない。

OOO 佐藤陽





dzdz | づづ

着け心地が良く、末長く使えるスキングジュエリーを製作。指輪は地金のカットから溶かし繋いで、叩いて成形、磨きといった工程を経て完成する。シンプルながらも細かなこだわりが詰まった指輪。結婚指輪のご案内も可能。

神奈川県川崎市
麻生区百合ヶ丘 1-16-36-2F
<https://www.dzdz.jp/>



天六の住宅

敷地は大阪の中心地。商業地域に位置し、周囲は商業施設や昔ながらの長屋住宅などがひしめき建つ。クライアントはこの密集地に開放感のある空間を求めた。この立地で唯一自由である垂直方向への拡張を意識し、3 層繋がる大きな気積をつくり、その気積をトラス梁で支えることを考えた。無柱空間をつくる大スパンのためのトラス梁でもあるが、住宅スケールにあえて異なる尺度の大きな要素を置くことで知覚が相対化され、空間の開放性やダイナミズムがより浮かび上がることを意図した。この空間の骨格となるトラス梁を「大黒柱」ならぬ「大黒梁」と呼んでいる。3 層吹き抜けの頂部のハイサイドライトから入る光がフィンに柔らかく跳ね返り、大きな気積を光で満たす静謐な空間が立ち現われるだろう。



直方の児童発達支援事業所

大自然に囲まれた木造平屋建ての計画。シンプルな切妻屋根の箱を森の中に丁寧に配置した。視線の抜け、アプローチに対しての顔の見え方、石垣との関係を意識して、流通材の長さである 6m以内に抑えたスパン割を採用することでコストを抑えた。それによっておちた柱がシンプルな箱を少しずつ崩し、よりどころを持つ建築となっている。



千葉の住宅

ほぼ正方形の敷地に、肩流れ屋根・切妻屋根・合掌造りのような急勾配屋根という三つの屋根を繋げ、その中心に庭を設けている。前面の肩流れ屋根は、門のような存在でありながら、背後を走る千葉モノレールの線路と平行に伸び、街の動きと静かに呼応する。暮らしの中心となるキッチン・リビングは、庭を囲むL字型の切妻屋根をかけることで”家らしさ”をつくり、その端部は、急勾配の屋根へと接続している。小さな子ども部屋を内包した小屋裏のような2階は、片側を1階の梁に載せることで成立した独特のプロポーションをもつ。私たちは、このアイコニックな屋根を「お化け屋根」と呼んでいる。

on site
OOO architecture projects

column

らしさとあたらしさ

駒形克己氏が描いた絵本「ごぶごぶごぼごぼ」が好きだ。この絵本に登場するのはいどり豊かな丸と不思議な擬音。「ぶ」「ぶくぶく」「ごぶごぶ」「しー」このような擬音と共に、その大きさや色、並び方を次々に変化させた丸たちが現れる。最初はこれが一体何なのかわからないけれど、こども向けの絵本でありながら強く惹かれる何かがあった。初めて目にする「丸」の配列と不思議な「擬音」であるが、繰り返し声に出

して感覚的に読解を進めると、次第に「そのものらしさ」を自分なりに理解し始める。私はこの物語は、海の中を舞台にそこで聞こえる音を抽象化した記号と擬音によって表現したものと解釈した（後に知った実際のテーマは「お母さんのお腹の中」だったので遠からず?）。対象がこどもであるからこそかもしれないが、最小限かつ鮮明な情報量で「そのものらしさ」を新たな感覚で知覚させる作者の表現に感動を覚えたのである。一般に「らしさ」とは、時間をかけて積み上げ

てきた特徴の集合から立ち現われる感覚だと思う。個人であれば性格や価値観、経験の層。文化や建築であれば、土地の気候、社会の営み、技術の蓄積が背景となる。つまり「らしさ」とは過去の蓄積が生む説得力である。ただデザインにおいては「らしさ」だけではつまらない。あるデザイナーは「らしさのない新しさは空虚で、新しさのないらしさは硬直する。」と言っていた。私も両者は循環関係にあり、らしさは新しさを成立させるための地盤になるものだと考えている。「らしさ」を理解して耕し、

その内側から変形として立ち現れる「あたらしさ」を見出すことを大切にしたいと日々考えている。

ooo 和田彦丸



The Vision of **ooo**

MAKE CULTURE

MAKE CULTURE

文化とは原始から現在まで人類が積み上げてきた人間の豊かさの蓄積であると私たちは考えています。そして、これから生み出す私たちの建築もその文化を積み上げるものでありたいと考えています。私たちはこのような建築を設計するために、建築という分野にクローズドにならず、建築を建てるという目的に関連する、衣食住、芸術、音楽、映画、ファッションなど様々な分野のプロフェッショナルと、必要に応じてアメンバーのようにチームを成しながら、建築を設計していきたいと考えています。そして、このようなスタンスで生み出される建築は人々の営み総体としての文化を纏ったものになると考えています。OOO は「Make Culture」というビジョンを実現するために「Dive・Play・Make」の3つのスタンスを基に活動を行います。

DIVE

いいかい、怖かったら怖いほど、逆にそこに飛び込むんだ。

やってごらん。

岡本太郎

昨今、私たちを取り巻く価値観は急速に変化しています。建築・デザインの分野はもちろんのこと、デジタル技術、環境問題、SDGs、LGBTQ+等、ダイナミックに変化する新しい価値観に対し食欲に興味をもち、SNS や画像検索だけで得た知識だけでなく自分たちの体と頭で理解を深めます。また、これまで建築が建築として扱ってこなかった分野や業務にも積極的に身を投げ出し、フィジカルにその価値感を体感します。

PLAY

「Dive」した環境には、必ず解決すべき課題や調整事が存在します。私たちはそういったすべての物事に対し誠意をもって向き合います。そして、そのような物事全てを与条件として受け入れ、同じテーブルに並べ、フェアな目線で眺め、手を動かして設計を進めます。また、クライアントはもちろんのこと各分野のプロフェッショナルと協働し、議論しながら設計を進めていきます。このような態度で検討を重ねることができると考えています。そして何より、このようなスタンスで設計を行うことで、私たちだけでは行き着くことのできない発想に到達できることに私たち自身も建築的な好奇心を持っています。

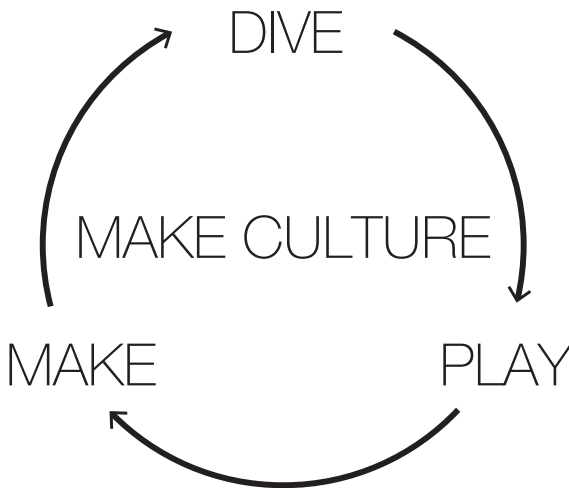
MAKE

「Dive」と「Play」によってうまれた文化の種を図面や模型に練り込みながらその建築を実現していきます。建築は一人の手で完成することは決してありません。施工者の方々とコミュニケーションを図り、細部にいたるまで血の通った建築を都市に生み出します。このようなプロセスにより生まれる建築は、本質的な意味で文化を纏ったものになると考えています。この新しい文化を醸造する「Make」によって生まれた人と人、物と物、あるいは人と物のつながりは、あらたな世界への「Dive」へのきっかけとなります。OOO は「Dive・Play・Make」の循環によって「Make Culture」を実践していきます。



OOO デザインプラットフォーム

アメンバーのように流動的に変化するデザインプラットフォームのイメージ。プロジェクトベース、あるいは哲学や思想などの観念でのつながりもあり得るのかもしれない。人と人のつながり方が劇的に変化した現代において可能な、新しいチームの成り立ちをめざす。



Make Culture の循環モデル

Dive・Play・Make を運動のきっかけとした Make Cultureの循環モデル。文化を造るという大きなビジョンを実践していくには常に動的であることが重要であると考えている。変化を受け入れ、スパイラルアップしながら運動を持続させていくことが必要である。

Profile



佐藤 陽 Yo Sato

1985 福岡県生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了
2011-2021 株式会社佐藤総合計画
2015- OOOarchitecture 共同主宰
2022- 駒澤女子大学非常勤講師



馬場 亮平 Ryohei Baba

1985 長野県生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 スイス・メンドリジオ建築アカデミー奨学生
2012 千葉大学大学院工学研究科 修了
2013-2022 鹿島建設株式会社
2015- OOOarchitecture 共同主宰
2025- 千葉大学非常勤講師



和田 彦丸 Hikomaru Wada

1986 大阪府生まれ
2009 千葉大学デザイン工学科 卒業
2011 千葉大学大学院工学研究科 修了
2011-2023 鹿島建設株式会社
2015- OOOarchitecture 共同主宰



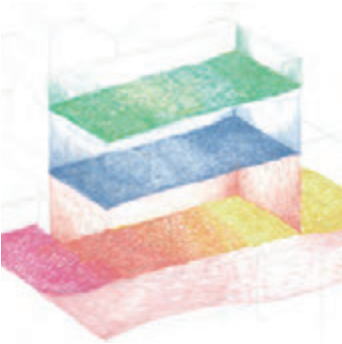
OOO architecture (オーアーキテクチュア)

Award

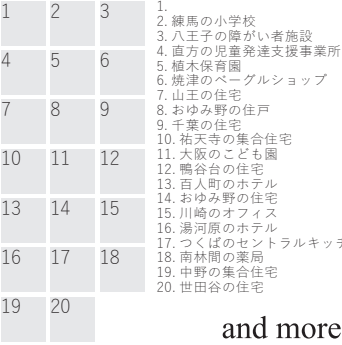
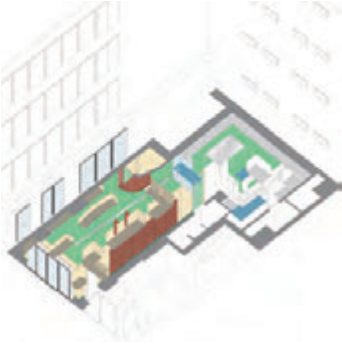
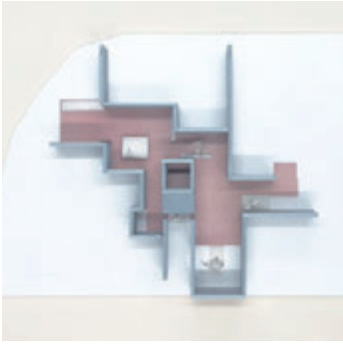
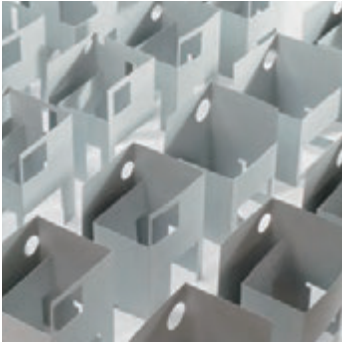
- 2018 千葉市都市文化賞 優秀賞
- 2019 日本空間デザイン賞
- 2024 グッドデザイン賞
- 2025 千葉市都市文化賞 グランプリ
- 2025 千葉県建築文化賞 入賞

Tel : 03-6903-1163
Mail : contact@oooarchitecture.com
HP : <https://oooarchitecture.com/>





on going...



八王子の障がい者施設

location : Tokyo,Japan
function : welfare facility
structure : RC
completion: 2028

練馬の小学校

location : Tokyo,Japan
function : elementary school
structure : RC
completion: 2028

天六の住宅

location : Osaka,Japan
function : house
structure : timber
completion: 2026

直方の児童発達教室

location : Fukuoka,Japan
function : child development support center
structure : timber
completion: 2026

直方のこども園

location : Fukuoka,Japan
function : nursery school
structure : -
completion: 2026

焼津のベーグルショップ

location : Shizuoka,Japan
function : bakery shop
structure : timber
completion: 2026

山王の住宅

location : Tokyo,Japan
function : house
structure : timber
completion: 2026

おゆみ野の住戸

location : Chiba,Japan
function : house
structure : -
completion: 2026

千葉の住宅

llocation : Chiba,Japan
function : house
structure : timber
completion: 2026

祐天寺の集合住宅

location : Tokyo,Japan
function : residential
structure : RC
completion: 2026

大阪のこども園

location : Osaka,Japan
function : nursery school
structure : timber
completion: 2028

鴨谷台の住宅

location : Osaka,Japan
function : house
structure : timber
completion: 2027

百人町のホテル

location : Tokyo,Japan
function : hotel
structure : RC
completion: 2026

おゆみ野の住宅

location : Chiba,Japan
function : house
structure : -
completion: 2026

川崎のオフィス

location : Kanagawa,Japan
function : office
structure : S
completion: 2027

湯河原のホテル

location : Kanagawa,Japan
function : hotel
structure : RC
completion: 2027

つくばのセントラルキッチン

location : Ibaraki,Japan
function : central kitchen
structure : S
completion: 2028

南林間の薬局

location : Kanagawa,Japan
function : pharmacy
structure : -
completion: 2026

中野の集合住宅

location : Tokyo,Japan
function : residential
structure : RC
completion: 2027

世田谷の住宅

location : Tokyo,Japan
function : house
structure : timber
completion: 2027

and more



京都駅ビル / 設計：原広司（アトリエ・ファイ建築研究所） 2012年6月3日撮影
日曜日、この建築の頂の大階段で京都合唱祭が行われ、人々が行き交う京都駅の“谷”に若者たちの歌声がこだましていた。